

過去の出来事を“語り継ぐ”ということ

菅野幸恵 青山学院女子短期大学 Yukie Sugano Aoyama Gakuin Women's Junior College

北上田源 沖縄平和ネットワーク Gen Kitaueda Okinawa Peace Network

実川悠太 水俣フォーラム Yuta Jitsukawa Minamata Forum

伊藤哲司 茨城大学人文学部 Tetsuji Ito College of Humanities, Ibaraki University

やまだようこ 京都大学大学院教育学研究科

Yoko Yamada Graduate School of Education, Kyoto University

要約

本論文は、奈良女子大学で行われた日本質的心理学会第4回大会におけるシンポジウムの内容を収録したものである。北上田氏は、沖縄での平和ガイドの実践経験から、非体験者が過去の出来事とどのように出会うのかという体験の創出を重視した、伝えながら共に学ぶガイドのあり方について述べた。実川氏は、水俣展を開催した経験から、自由に足を運びやすい展覧会という場の可能性、聞く側の準備の必要性について述べた。ふたりの話題提供に対して、質的心理学の立場から、伊藤哲司氏、やまだようこ氏がコメントを行った。伊藤氏はベトナムやタイでのフィールドワークの経験から、あえて語らないことの意味についてコメントした。やまだ氏はナラティブの立場から、2氏の実践のあり方と語り手と聞き手の関係をむすぶメディエーターの役割を重視した協働の学びのトライアングルモデルとの関連について述べた。最後に、“語り継ぐ”ことについて、双方向性、メディエーターを通じた個別の体験のむすび、語らないことの意味から考察した。

キーワード

語り継ぐ、語り、双方向的関係、世代、メディエーター

Title

The Narrative Transmission of Past-Historical Events from One Generation to the Next

Abstract

This paper discusses the symposium of the 4th Conference of the Japanese Association of Qualitative Psychology at Nara Women's University. At the symposium, four panelists presented their views on the transmission of stories from one generation to the next. Kitaueda, a lecturer in peace education in Okinawa, delivered a lecture entitled "In the cause of the co-guide". In the lecture, Kitaueda emphasized the creation of experiences. Jitsukawa discussed "minamata exhibition" and emphasized the possibility of the exhibition style and the preparations required on the part of the listener. Yamada and Ito provided a commentary from the perspective of qualitative psychology. Ito discussed the meaning of impossibility in narration. Yamada discussed the relationship among their practices and her Triple Dialogical Model that connect the narrator, the mediator and the listener.

Key words

transmission of stories, narrative, interactive relationship, generation, mediator

1 はじめに

菅野幸恵（青山学院女子短期大学）

1 論文のなりたち

本論文は、2007年9月29日（土）に奈良女子大学で行われた日本質的心理学会第4回大会におけるシンポジウム「過去の出来事を“語り継ぐ”ということ」に基づくものである。このシンポジウムは沖縄、水俣という現場で活動されている2氏に、質的心理学会という現場でそれぞれの実践を報告いただき、ふたつのフィールドで生まれた知を質的心理学というフィールドにつなげたいと考えて企画したものである。実際2氏の活動から生まれた実践知は質的心理学に携わる者にとって示唆に富むものであり、指定討論、フロアの参加者を含めての討論の時間は、活動の場所は違えども、こんなにも共振しうるものがあるのだということに素朴な驚きを感じさせるものだった。本論は、話題提供者2氏の報告を文字起こしした上で補筆修正を加え改稿したもの、当日の指定討論者が改めて寄せたコメント、そのコメントに対する話題提供者の応答を再構成し、最後に企画者のまとめを付したものである。なお、本論文のもとになったシンポジウムは日本質的心理学会研究交流委員会の企画である。

当日のプログラムは下記のものであった。

企画	日本質的心理学会研究交流委員会
話題提供	北上田源（沖縄平和ネットワーク） 実川悠太（NPO法人水俣フォーラム事務局）
指定討論	伊藤哲司（茨城大学） やまだようこ（京都大学）
司会	菅野幸恵（青山学院女子短期大学）

2 問題と目的

2005年6月、同年2月に実施された青山学院高等部入試の英語出題文に「ひめゆり学徒隊の証言は退屈」という内容が出題されたことが報道され、物議をかもしました¹⁾。この事件は“語り継ぐ”ということに関

わる重要な問題を社会に投げかけた。過去の出来事の体験をどう語り継いでいくかということは、戦争に限らず災害や事件、事故といったことにおいても重要なことである。語り継ぐことの重要性は出来事の重大性が大きいほど増すが、出来事の重大性が大きいほど語り継ぐことの困難さも増す。その出来事を体験していない者が、体験そのものを実感することは不可能に近いし、体験者が体験を語ること自体に伴う困難さ（語ること自体の難しさ、理解してもらえないのではという危惧など）も大きい。語り継ぐことの困難さや不可能性を乗り越えていくためには、下嶋（2004）が体験の風化は自然の力によるものではなく「語り継ぐ形」が未完成なため生じるとしているように、何を伝えていくのかということだけでなく、どのように伝えていくのかということを考えることが重要だろう。それでは過去の出来事を風化させないために、どのように“語り継ぐ”ことができるのだろうか。そもそも“語り継ぐ”とはどういうことなのだろうか。

本論では、以上のことを考えるために、まず「沖縄戦²⁾」「水俣病事件³⁾」という過去の出来事を語り継ぐ、伝えることに関わられている2氏が、過去の経験の物語を引き受け語り継ぐ者の視点で、語り継ぐ形、その方法についての実践報告をする。続いて、質的心理学の立場から2氏の報告にコメントし、さらに2氏がコメントをうけて応答する。その対話を通して“語り継ぐ”ことについて考えていく。

2 ともに学ぶ平和ガイドを目指して

——沖縄平和学習の現場から

北上田源（沖縄平和ネットワーク）

今日（2007年9月29日）、沖縄では午後3時から5万人規模の県民大会が行われている。教科書検定意見の撤回を求める県民大会である。文部科学省の検定意見によって、日本軍が住民を集団自決に追いやったという事実が教科書から消されようとしており、そのことに対して沖縄（県民）は怒っている。この検定結果が明らかになって以来、沖縄では連日マスコミ、新聞とテレビなどでかなりこの問題が取り上げられている。た

だ、そこでは何を伝えるかという話にはなっても、どうやって伝えていくのかという方法論に関する議論にはあまりならない。そういうこともあり、今日私は奈良にきて方法論に関する議論をすることで、1人で県民大会をやるとうつもりでいる。私は普段平和学習の現場で平和ガイドをして、沖縄戦のことを伝えたり一緒に考えたりしているので、今日はそういう立場から具体的な話をさせていただいて、その上でみなさんの議論に貢献できればと思う。

1 平和ガイドとは

平和ガイドという言葉を知らない方もいると思うが、沖縄ではかなり市民権を得た名称である。平和ガイドとは、沖縄戦の研究がここ30年くらいでかなり進み、その成果を平和学習の場に持ち込もうと、沖縄戦の実相を住民の目からしっかり伝えていこうということで誕生したものである。

沖縄には年間43万人くらいの修学旅行生が来て、その多くが平和学習をしている。平和ガイドはその平和学習の現場についてサポートをする。最初の頃は一部の研究者や、現場の教員の方が平和学習の現場に立って、平和ガイドをしていたが、現在は平和ガイドの数もかなり増え、多様化している。例えば私は琉球大学の学生のと時から始めたのだが、学生もいるし、主婦もいるし、戦争体験者もいるし、学校の先生もいるし、大学の先生もいるし、国会議員もいるし、かなり多様な平和ガイドが存在する。ただ、平和ガイドを専門にやっている方はあまりいない。何かほかのことをやりながら、一方で平和ガイドをしているという方が非常に多く、それが沖縄の平和ガイドの特徴かもしれない。

私自身は現在、主に沖縄平和ネットワークという団体で平和ガイドをおこなっているが、その平和ネットワークは、沖縄戦研究の初期のころにできた沖縄戦を考える会の流れを継承したものになっている。沖縄県内には、他にも平和ガイドをしている団体がかなりたくさんあり、現状では沖縄県、行政が主体となって始めた団体が一番大きい平和ガイドの団体になっている。

2 私と平和ガイド

なぜ私が平和ガイドをしているのか。出身は京都で、18歳までずっと京都に住んでいた。大学進学を機に沖縄に移住し、大学の共通教育の科目のなかで、「基地と戦跡」という授業があって、そこで沖縄戦について興味を持った。沖縄戦や基地の問題に関心をもったことをなんとかして活かしていきたいなど考えたときに、「基地と戦跡」という授業を受けた学生が有志で平和ガイドをしている団体⁴⁾に出会い、その団体の一員となって平和ガイドをやりはじめた。それから7年、8年くらい経っていて、数としては、正確に数えてはいないのだが、100回以上平和ガイドの活動をしている。

もともと大学に入学したときは理系だったのだが、そうやって平和ガイドの活動をしながら、徐々に教育という分野にも惹かれていき、教育学部ではないが、大学3年のときに文系に変わった。大学を卒業後、去年おととしと2年間中学校で非常勤講師をして、今は沖縄県内にあるいわゆるフリースクールのようなところ2か所かけもちで非常勤講師をしている。だから、今は土日にしか平和ガイドはしていない。何も知らない京都の高校生だった自分が、いったいなぜ沖縄に行って平和ガイドをはじめ、なぜそれが継続されているのか。活動を継続してきることができた重要な要素として2つのことがある。

1つ目はいろんな出会いがあったということである。一番大きかったのは戦争体験者との出会いである。戦争体験者に会って、実際に面と向かって話を聞く、本当にいろんな戦争体験者がいるのだが、私が最初に話を聞いた方は、話せなかった。話したくなかったのかもしれないのだが、実際に語ろうとすると言葉が出なかったという状態だった。

そのときは戦後50何年くらいだったが、まだ語れない人がいるのだということは、それまで戦争のことを全然知らなかった私にとって非常に大きいことだった。人のつながりという意味でいうと、体験者だけではなくて、先ほど紹介した学生で平和ガイドをしている団体の存在、みんなで一緒にやっているということは重要なことだった。わからないことを現場に行き確かめたり、証言者の話を聞いてみたりする、そうじゃな



図1 ガマでの平和ガイドの様子（撮影：豊里友行）

いあじゃないと気軽に話し合える人がまわりにいたということは、私が活動を継続する上で非常に大きかったと思っている。

もう一つは、人前で語る、表現する機会が継続的にあったということである。自分が勉強して感じたこと、考えたことを言葉にすることが求められる、平和ガイドとしてそういう立場に立っていったということである。こうして継続的に人前で語る、表現の機会があったということが、自分自身の足取りを確かめる上でも大きな意味をもったと思う。

3 平和ガイドの様子

(1)「現場」で語る

次に実際にどんなことをしているのかということを実物等を使いながら紹介したい。平和ガイドはふつう現場で語る。今日のようにマイクを使って話すという経験はほとんどない。例えば沖縄には地質の関係で、自然の洞窟がたくさんあるのだが、その自然の洞窟が沖縄戦のときにもいろんな使われ方をしていた。ガマと呼ばれるその場所に生徒と一緒に入って、それで沖縄戦の実像と一緒に確認したりする。

私が最初にガマに入ったときの衝撃は忘れられない。教科書で学ぶような戦争の姿とはまったく違うものが見えてくる。ガマに入って、当時の人が身を置いていた場所に身を置いたときに、これが地上戦の実態なんだ、こんなところに人が追込まれるんだということに、そのときの私は衝撃を受けた。さらにそのとき私を案内してくれた平和ガイドさんが言った言葉が忘れられない。ガマに入ったとき私は、「こんな暗いところにいたんだ」というところに驚いたのだが、その平和ガイドさんは「当時の人にとってガマという場所がどんなところだったのかわかりますか」と聞かれた。そして、「ある戦争体験者の方は、このガマに戦争中に入ったときにはまるで天国に上ったような気分だったといわれるんだよ」と語るのである。それは、私がガマに入るだけではわからないことである。そのガイドさんの言葉によって、私はさらに沖縄戦に近づくことができたのではないかとと思っている。

私は今でもガマでその話をするのがよくある。確かに現場に行くことは沖縄戦を知る上で非常に大切だと思っているが、行っただけではわからないこともあるということを経験したので、平和ガイドとして、行っただけではわからないことを補足していけ

ればと思っている。

(2)「実物」で語る

地上はどんな様子だったのかということ伝えるために、私は爆弾の破片をよく使う。それは私が大学の一年のときにある公園で拾ったもので、今でも沖縄にはそういうものが落ちていて。ガイドする時には、この破片を持って行って、まず「みんな爆弾が爆発したところ見たことある？」と聞く。もちろん私も含めて見たことがない。次に、なかなか想像しにくいのだが、「これがどんな風に飛んで来るんだろう」と聞いてみる。修学旅行生は、これが上から落ちてくるんじゃないかと想像するのだが、そうではない。破片はすごい勢いで横から飛んでくるのだ。

爆弾というのは真ん中に火薬があって、その周りが鉄で囲われている。信管というスイッチに衝撃が加わると、火薬に火が点いてその衝撃で破片がまわりに飛び散る。だから、そういうものがまわりからすごい勢いで飛んできたりする。それが沖縄戦の実相なんだよということを伝えている。さらに、これがどれくらいの勢いで飛んでくるのか？ということ、沖縄で今でも見つかる不発弾の事例から語る。沖縄戦のときかなり使われた250キロ爆弾という爆弾が不発弾として見つかったときには、半径400メートルくらいが避難の対象になる。逆に言うとうような爆弾の破片は400メートル飛ぶ可能性がある。それは、不発弾処理をしている方にも確かめた。

だから、生徒には「沖縄戦のときに1個の爆弾が落ちてきたら、こういう鉄の破片が400メートル飛ぶんだよ」「僕らがこれを投げたときにどれくらい飛ぶかな。20メートルくらいかな。それでもあたら痛いやね。だけど、戦争当時はそれが400メートル飛ぶ勢いで飛んで来るんだよ。」という話をする。そして、その爆弾がどのくらい落とされたのかとか、爆弾投下で穴の開いた写真を見せたりして、ガマが安心だと思えるような、地上の様子はどんなものだったのかという話をしている。

(3)「資料」を使って語る

現場や実物だけで語ることを補足するために資料を使うことも多い。一つの例として、中学校で教えてい

たときに生徒と一緒につくった、沖縄のある地域の方がどこで亡くなったのかということ地図で示したものがあ。戦争体験者の話は個別具体的な話になりがちなので、その体験者の話を一般化普遍化するためにそのような資料を使うことが多い。

1945年の3月までだったら、沖縄から日本兵として出兵された方もかなりいたので、中国大陸で亡くなった人も多い。沖縄戦が始まって、1945年の4月はまだ亡くなっている人は少ないが、5月になると徐々に亡くなる人が増える。しかも亡くなった場所が変わってくる。6月の前半になるとかなり南によってくる。6月の後半になると、ほんとに南に追い詰められて、たくさんの方が亡くなったということがわかる。さらにふつう沖縄戦の地上戦といったときに南に追いやられて亡くなったということが話の中心になってくるが、それで終わりではなくて、1945年の7月以降になると、北部の収容所に入れられて、それでも飢え死にした人がかなりいる。このような資料を使うことで、沖縄戦の空間的なひろがりとか時間的なひろがりと一緒に確認したりすることができると考えている。

(4)「体験者の語り」を今につなぐ

私には戦争体験はないので、戦争体験の話はできない。ただ、私自身が戦争体験者の話を聞いてかなり動かされている部分が多いので、修学旅行生にはできるだけ直接体験者と話してもらいたいと思っている。そのために、戦争体験者と修学旅行生をつなぎたいと思って、直接対話できるような機会をつくるようにしている。

そのためには、私自身がたくさん戦争体験者と知り合いになっておかなければいけないので、日常的に多くの戦争体験者の方と言葉を交わして、その方々がどんなことを語られるのかということ把握するようにしている。ただ沖縄の場合だと、そのとき生きておられた方はすべて戦争体験者であるため、全員にというのは無理だが、例えば沖縄戦のときにひめゆり学徒隊として動員された方々は、今でもひめゆり平和祈念資料館で毎日話をされている。そういうところには行くようにしているし、修学旅行生にも行ってもらうようにしている。

しかも話を聞くだけではなく、尋ねるように修学旅

行生に促している。それは、私自身が2004年から2005年にかけて、虹の会⁹⁾という会に参加して、その会のなかで訊くことが大切なんだということを学んだからである。修学旅行生にもできるだけ話を聞いて終わりではなくて、訊く、問う、尋ねるということを求めている。

4 私の目指す「平和ガイド」への試行錯誤——伝えながら共に学ぶ

(1) 共に探求する

ここまで述べた平和ガイドのやり方は、沖縄での一般的な平和ガイドのあり方だと思うが、この平和ガイドのあり方はどこかで変わっていかねばならないのではないかと考えている。というのも、どうしても伝えるだけの平和学習、私が話す、私が勉強したことを話すだけの平和学習に限界を感じるからだ。単純に言うと、伝わっていないのではないかという危惧がある。戦争体験者が少なくなってきた今、生徒が、私の話を聞く人が主体的に直接沖縄戦に関わることができるような取り組みがどうやったらできるかということを考えていて、そのために平和学習のあり方も変わっていかねばならないのではないかと考えている。

結論から先に言うと、体験者が少なくなっているからこそ、非体験者が沖縄戦とどうつながっていくのかということが非常に重要だろう。今回のテーマは「語り継ぐということ」なのだが、個人的には語り継ぐだけで終わってしまったのはダメだろうと思っている。その理由として、非常に単純に言うと、体験の継承というと右から聞いたことを左に伝えていくという印象で捉えられやすく、そのことに対して大きな違和感がある。

ではどうなっていけばいいのかというと、私は次のように考えている。それは、私が沖縄戦と出会って感じたこと考えたこと、成長してきた経緯があるので、そのことを生かして修学旅行生なり非体験者とともに学びながら、私たちが沖縄戦と新しく出会っていくという形である。言い換えれば、体験の継承も確かに重要だが、非体験者がどう沖縄戦と出会って、どうつながっていくかという体験の創出にもっと重点が置か

れるべきではないかと思い、そのための取り組みをしている。

例えば、平和学習のなかである修学旅行生がガマから見つかったという三角定規をみて「これ何に使われてきたの」という疑問を私に投げかけてきたことがある。その疑問に対する答えがわからなかった私は、その修学旅行生と一緒に元ひめゆり学徒の戦争体験者にその疑問を尋ねに行った。そこで体験者は「戦争に行っても、文房具を使って勉強ができると思っていた」と言われるのである。つまり、沖縄戦でひめゆり学徒隊は壮絶な体験をするのであるが、戦場に行く直前までその実態を全く知らされていなかったということがわかったのである。生徒の発した疑問をきっかけに、一緒に調べていくことで私にとっても新しい沖縄戦の姿が見えてきたのである。

おそらく、修学旅行生にとってその時間は、私の話を聞くだけで終わらない、かなり印象的な出会いになったのではないかと思う。そうやって聞く一方ではなく、修学旅行生なり非体験者が自ら関わっていけるような取り組みを小さくてもいいから平和学習のなかでしていきたい、そのためのサポーターとして平和ガイドがいるべきだと思っている。

(2) 忘れられない私の出会い

また、非体験者が主体的に過去の出来事に関わることができるきっかけを作るためにも、私は私自身が沖縄戦とどのように向き合っているのか、という私自身の体験を語ることを大切にしているので、その事例を紹介したい。

これまで沖縄の糸満市にあるひめゆり平和祈念資料館には何回も何回も足を運んでいるのだが、あるときふと気づいたことがあった。それは、第4展示室というところ、そこには証言が並んでいて、壁には亡くなった方の写真が貼ってあり、あるときひとりの教員の写真の前で足が止まってしまった。教員も教え子と一緒に戦場に行って亡くなり、その写真があること自体は知っていた。それなのになぜそのときそこで足が止まったかという、ひめゆり学徒隊を引率した教員のなかにひとり、そのときの私と同じ年の地理と歴史の教員がいたことに気付いたからだ。

同じ年ということもあるし、その時は私自身ちよう

ど中学校の非常勤講師を始めたばかりだったので、同じような境遇の人がいるんだと思って気になって調べ始めた。そのなかでいろんなことが見えてきた。まずは、話を聞いた元ひめゆり学徒の方、つまり、その先生の教え子は、みんな口をそろえて非常にいい先生だったと言っていた。いつも生徒と一緒にいて、生徒と一緒に泣いたり笑ったりしてくれるとてもいい先生だった。ガマのなかで生徒が辛い思いをしているときには、歌を歌ってなぐさめてくれたという話をいろんな人から聞いたりする。

しかしもう一面では非常に立派な軍国教員であったこともわかった。その先生は当時沖縄から本土に行って教員免許を取って母校に帰ってきた方で、その方が非常に立派な軍国教員になっている。ありていに言えば、教員の戦争責任ということになるかもしれないが、その先生が生徒を戦場に引っ張っていった。生徒が辛いときには歌を歌ってその場に生徒をとどまらせた、そういう役割を果たしていたんじゃないか、という見方もできることがわかってしまったのである。

学校の非常勤講師をする傍らでそういうことを調べれば調べるほど、私がおのさき教員を続けるべきなのかどうかという疑問がつきまとうようになってしまった。実際に現場に、教室に入ってしまうと、そこで生徒とのやりとりでいっぱいになってしまう。そのなかで生徒と一緒にいたいと思うのだが、もしそのさきに再び戦争があったときに私は果たして学校の現場のなかで、NOとすることができただろうか、何か行動を起こしていくことができるのだろうか、ということにひっかかってしまった。私自身が将来どう生きていくかということを選択していく判断の材料として、このひめゆり学徒隊の教員の方の存在は非常に大きな意味を持つてくるのである。それは私自身にとって大きな出会いだった。

非体験者が戦争と出会って、向き合ったことが、自分の将来進むべき道を変えていく。そんな形で沖縄戦とつながっていくことができれば、沖縄戦のことはそう簡単に忘れられるものではなくてなってしまう。これは私自身の体験であって普遍化できないし、私自身の体験であることに意味があると思う。だからこそ、こうした出会いをもっと大切にしたい。戦争体験が多様であるように、非体験者が沖縄戦と出会っていく体験

も多様であり、そのことがもっと大切にされるべきなのではないかと考え、実践している。

3 水俣から“経験の継承”を考える

実川悠太（認定NPO法人水俣フォーラム事務局長）

私が16歳のときに、水俣病患者がチッソ東京本社の前で座り込みを始めた。学生運動の影響もあって、社会問題に関心のあった高校生としては何か手伝えなかなと思って通い始めた。それから水俣病の人々とつきあい始めて30数年経つが、私はいま水俣フォーラムという、会員1000人、常勤3人、非常勤3人の小さなNPOで働いている。今回はその活動のなかで、患者の人たちと接してきた経験から、「語り継ぐということ」もしくは「他者の経験したことを自分のこととして受け止めてもらうためには何をしなければならぬか」について考えてきたことを述べる。

水俣病事件というのは発生が確認されてからすでに50年も経っているのに、言葉だけは知られている。しかし、まだ誤解されているところが多く、一昨年出版された疫学の教科書の中にさえ「1960年に廃水の浄化施設が稼働し、その後患者の発生はみられなくなった」などというチッソや行政さえもう言わなくなった誤ったことが書かれている。実は正確な被害者の数さえ今でもわかっていない。そして、不幸なことに今でも新たな患者が出てきている。

水俣病の歴史を大雑把にいう（実川、2002）と、水俣病が発見されたのは1956年だが、12年も経った1968年にやっと政府から公害と認められる。それまでは「奇病」として扱われてきた。1973年にチッソの法的責任が確定して認定患者への補償内容が決まり、さらにその23年後の1996年には1万人を超える未認定患者も和解して「終わった」とされた。しかし、唯一残った訴訟で2004年に最高裁が国と熊本県の責任も認め、それまで行政から患者と認定されていなかった人にも賠償を命じたことで、実は自分も患者だったんだと名乗りを上げだした人が現在まで1万数千人にのぼっている。これによって今まで水俣病と診断された人だけで3万人以上となり、疫学的には当時の沿岸住民の累

計からすると、10万人から20万人が健康に影響を受けたと類推されている。

1 水俣フォーラムはどのようにして生まれたのか

1992年に、私は水俣病についての展覧会を東京で開催したいと考えた。当時は裁判や交渉をしている患者たちも非常に高齢化してくたびれていたし、和解必至という状況になっていた。しかし、それまでの長い経過の中で、石牟礼道子さん、土本典昭さん、原田正純さんをはじめとする多くの人々の仕事⁶⁾のおかげで、これは単なる公害事件と考えるべきではなく、さまざまな政治的、社会的、文化的な問題が指摘されていたので、他の公害や薬害事件のように和解ですべてが終わったことのように感じていいのだろうかという危惧があった。そこで、それまで水俣を表現したいものだけを集めて展覧会を開催したいと考えた。

なぜ展覧会かという点、展覧会が一番いいかげんでも足を運びやすい。つまり軽い気持ちでも行きやすいからである。講演会は途中で帰りにくいし、映画は決められた時間を拘束するが、展覧会というのはつまらなければ5分で帰ることもできるし、興味がわけば2日、3日と通うこともできる。そういう誰もが来やすい形で実現しなければならぬと考えた。私はそれまでも水俣病の患者支援運動をはじめ、自分自身の居住地の環境問題など、いろんな形で市民運動に携わることがあったので、市民運動はどこがダメかということをも自分なりに認識していたので、それに注意しながら水俣展（実川、2003）を作っていた。

2 水俣展をどのようにしてつくったのか

水俣・東京展は、4年かけて準備して全部で1億8千万円を集めて1996年に開催した。来場した人たちから高く評価していただいたので、その後、全国各地で18回開催して、現在までに12万人に見ていただくことができた。水俣展という催し、これを開催する水俣フォーラムというNPOをどのように作ったのかを述べる。

(1) 水俣病のことだけで水俣病を語る

私たちは社会的な問題について「このことを伝えた

い」と思うと、思い入れのあまり不用意に思想めいたものを持ち込んでしまったりする。すると第三者、外側からは非常にとっつきにくくなってしまっているので、できるだけストイックになろうとした。水俣病のことをできるだけ水俣病のことだけで語ろう。環境、公害という概念とか、民衆と権力とか、イデオロギーを持ち込まないで、できるだけ水俣病の事実だけを語ろうと努めた。主張を押し付けるのではなく、事実だけをきれいに提示しようとした。現代の日本では、水俣病に限らず社会的な問題について関心を持っている人たちは、左翼的中老年市民とでも言うべき層に偏っているという危惧があった。しかし水俣病の問題はそんなことで済む問題ではないと考えて、できるだけいろんなことを持ち込まないようにしようということをも自分たちに課していった。

また、若い人たちにいかに参加してもらえるかということも考えた。メンバーの中には歴史学の色川大吉先生がいて、その頃色川さんは70歳くらいだったが、「私はあと10年くらいしか生きていないだろうから、10歳の人に比べると自分の価値は7分の1くらいしかない」などということを笑いながらおっしゃっていて、人に伝えることにおける若年層の大切さを意識していた。

(2) 生身の人間同士の信頼関係と実名へのこだわり

この展覧会を作る過程で、患者の方をお願いに行ったとき、どんなことに気を付けていたのかということ、患者は比較的若い人でも伝統的な共同体社会に住んでいるので、ビジネスライクなやり方では冷たい印象を与えてしまう。しかも水俣病というのは、いまでも圧倒的に多くの水俣病患者にとっては「恥」なのである。だから、自分自身の水俣病体験を人前で話してくれる方はほんのわずかしかない。たぶん全国に20人いるかいないかであろう。大半の患者が自分の水俣病体験を話そうとしない、隠そうとする。それは水俣病が発見されて以降、国や地方自治体がどのように対応してきたのかということがずっと尾を引いているわけで、あなたの写真を展示したいとか、あなたの発言を文字にしたいというような協力を求めるときに、患者の方々が信頼してくれるのは水俣フォーラムとか、水



図2 水俣展における遺影の展示

侯・東京展実行委員会という団体や肩書きではなく、「あなたと私」という「サシ」の関係、「お前と俺」の関係なのである。それで私たちも生身の人間と人間の信頼関係、唯一無二の個人から唯一無二の個人へ伝えることとして考えることの大切さがクリアになってきたので、水俣展の展示物を作るときも全部実名にした。「Aさんは」とか、「5歳の女の子が」という表現は極力避けて、「田中実子は」とか、「川本輝夫は」という固有名詞を出してリアルにリアルに表現していった。

というのは、喜怒哀楽をもった一人の人間としての被害者を明確に見せないと今の若い人には伝わらないということがだんだんわかってきたからでもある。私が若いころは、まず社会的な正義感とか、社会への関心があって、そこでもまれてなかなか自分が通用しないことに気付く過程で、自分という存在が少しずつわかって、自分への関心に結びつくというプロセスだったが、今の若い人は自分に対する関心から入って、それが拡がって行く過程で社会的な関心に結びついて行くようで、どうも逆の入り方をしているという

感じがしていたこともあって、一人ひとりの実在する個人にこだわって作っていった。それは展示物だけではなく、展覧会の会場運営全体についてもその点を大切にしていた。

特に私たちの水俣展で象徴的なのは患者の方たちの遺影だが、患者の氏名や住所はチツソも行政も公表していないから知られている方は数十人しかいないなかで、映画監督の土本典昭さん夫妻がどこに患者の誰がいるかというところから一軒一軒調べていった。1枚の写真さえ残せなかった方もいたが、土本さんは1年かけて500影を撮影した。その患者遺影と全員のプロフィールを23枚の大型パネルにして、直径9mの円筒型に建てて展示している。来場者にそこまでどう足を運んでもらうかと考えて展示全体を構成した。

結果的にはたくさんの人たちが来場したし、多くの若い人が足を運んでくれた。今でもそうだが、水俣展を開催すると20代以下が必ず入場者の半分以上を占める。だから若い人が社会的な問題に関心がないというのは間違っている。彼らのアンテナに届く催しが少ないだけなのではないだろうか。

感想文を読むと、小学生が書いていることも、大人が書いていることも本質的に変わりはない。行政、企業に対する懐疑、怒り、それから環境汚染の怖さ、患者への共感、生命の大切さ。さらにすすんで社会のあり方とか、自分の存在について問い掛けているし、どう生きたらいいのかという問いを率直に書いているものもたくさん残されている。だいたい入場者の3人に1人が感想を書き残しているが、一般に美術館や博物館でアンケートに記入する入場者は0.1%に満たないといわれるので、私たちは大変ありがたく思っている。

3 聞く側の準備

水俣・東京展は3万人の方に来ていただき、それ以降、水俣フォーラムとして全国各地で水俣展を開催するようになってからは、小学校や中学校、大学などから講演や授業の依頼も来るようになった。その中でも、患者の話を知りたいという場合が多かった。しかし、水俣病患者はすべて病人である。有機水銀は脳の神経細胞をこわしてしまうので水俣病は治らない。リハビリなどによって脳内の別の組織による代替機能がある程度出てきても、基本的に病人である。しかも全身に症状をもっているため、病人としては重い人たちである。そこで「患者さんの話を」と言われたときに、本当に被害者本人でなければ話せない話が聞きたいのかどうか、そしてそれはなぜなのかということをしていねいに聞いてみたら、実は患者本人ではなくてもいい場合の方が圧倒的に多いことがわかった。「水俣病を学びたいので、詳しい人にわかりやすく話をしてもらいたい」という場合が大半であった。つまり「アジェンションではなく、リアリティのあるわかりやすい水俣病の話ができる人」のことを「患者」と表現していたのである。

患者の方々にとって水俣病のことを話すのはつらいこと（水俣病患者自身による語りの記録として；栗原, 2000）なのである。ややもすると、私たちはこれを忘れそうになる。被爆者や戦争体験者も同じだが、研究発表やレポート、成功談とはまったく異なる。水俣病について話してくれと患者に言うことは、非常につらい記憶にもう一度面と向かえと言っていることと同じである。それでも「話そう」と思ってもらうためには、

「話せばわかってくれるのではないか」と思ってもらえる深い信頼関係が、講演依頼者との間にどうしても必要になる。それがなければ、当事者が話しても核心のないものになってしまう。さらに、せっかく話してもらうなら、それが本当に伝わるように配慮しなければならない。コーディネートする私たちが気を付けなければならないし、呼んでいただく方にも求めることがいろいろある。

例えば私が尊敬している、現在69歳の杉本栄子さんは、自分自身の体験を話すことが自分の定めというか、そのために生まれてきたと思っていらっしゃるような人である。この人は「自分もこうやって生きて来れたんだから」と言って人を励ましたいと思っている。だから杉本さんの講演を依頼される方は多いのだが、なかには病人の彼女に飛行機に乗って30分だけ話しに来てくれというような、考えてみれば苛酷な依頼もけっこう多い。しかし、彼女は自分の辛い体験を一生懸命話してくれる。その杉本さんの話にこういうものがある。

自分の母親が発病したことがラジオで放送されたために、漁村のなかで村八分になってしまう。共同井戸も使えなくなり、魚網も切られる、がけの上から突き落とされる。村人への恨みを泣きながら父親に言うと、「人様は変えられないから自分が変われ」と教えられたという。毎日生々しく話され、その話は人々の心を大変打つ。しかし、同じ漁村の人たちから水俣病というだけでなぜ嫌われたのかということは実はわかりにくい。杉本さんにしても、理由までは自分の体験ではない。だから話し手と聞き手を結ぶ者がそのことをケアしないと、なぜなのか聞き手には理解できない。その頃、チツソという会社が水俣市にとってどれだけ重要な会社だったか。そのことを当時の統計で説明するとか、漁村において魚を食べて病気になった者が出るということは、魚を買う人がいなくなることを意味するという話を話す必要がある。さらに村八分の具体的な意味は何なのか。共同井戸が使えなくなることが1950年代の、あの地方の漁村にとってどういうことなのか、というようなことがすべて説明されるべきである。そうでなければ杉本さんの意図を聞き手は受け取れないのが普通である。語り部が語り部として有能であれば有能であるだけ、本人の実体験をさらして話さ

れる。その場合、それが何ゆえそうなったのかという、その方の体験ではない部分については、ほんの少しでいいのだが、思い入れしないで説明する必要がある。

水俣病の問題でも戦争の問題でも、語る側の高齢化はもちろん問題である。しかしそれを問題にする前に私たちは、聞く側の聞く力を育てるための努力や工夫、配慮をしているだろうか。社会の変化が非常に早いので、今の子どもたちは50年前の社会がもう想像できない。おそらく、50年前の子どもたちはその50年前の社会を想像できたといえるが、現在ではまったく期待できなくなっている。そうすると、あらゆる体験とか経験を継承しようとするとき、その前提となっている当時の当地における社会状況や日常生活、社会的装置などの「物語の前提」についてきちんと説明しないと、言葉が言葉として成り立っていかない。つまり当事者が自分の体験に向かい合うということは大変なことなので、そのことを無駄にしない努力をしなければならないということである。

そのためにもう一つ大切だと思うのは、語り手が語るときに、聞く側の聞きたいという意欲が湧き出すように準備することが必要となる。大切なのは、聞き手の子どもたちの予備知識ではなく意欲である。話し手は、聞き手の意欲に敏感に反応する。撮影スタッフが話し手との信頼関係を結んだうえで作られた映像は、聞く側に心を開いていない当事者のナマの語りよりもよほど迫力がある。それなのに、水俣でも広島でも沖縄でもそうかもしれないが、何々館の職員が職務上やらざるをえなくてやっていた場合も少なくとも、何の内発的な欲求もない人が急に語り部の担当をしなくてはならなくなってやっていると、一番大切な部分が抜けたままで依頼されたのでは、形だけの語り部になってしまっても当然と言うべきではないだろうか。

水俣病の原因は有機水銀だが、有機水銀を排出し続けることによってチツソは大変儲けて、その資金で研究投資を一生懸命にした。その成果を私たちはみんな利用している。それがなければICも液晶もないし化学繊維もない。1950年代にチツソが開発した技術というのは、1970年代に患者補償金支払いのために他社に売られて、今でも世界中で使われているのである。そういう意味で私たちはチツソによる水俣病発生の恩恵にあずかっている。そして私たちが選択した政府による

対応の結果として、今でも30代の方が発病しているという事実がある。不幸なことに水俣病患者が再生産されつつけているので、高齢化して語り部がいなくなるという事態ではない。

つまり、水俣病の話を書く側というのは、実は話し手であり病人である患者の不幸によって多少なりとも恩恵を受けた、加害者に近い位置にいるということなのである。であればこそ、なおさら患者の好意や我慢に甘えるべきではなく、聞き手に必要な準備をきちんと指摘することが「経験の継承」という仕事にかかわる者の最低限のモラルではないかと考えている。

4 質的心理学の立場から

1 非体験者による出来事の語り継ぎ

伊藤哲司（茨城大学人文学部）

ともに非体験者であり直接の当事者ではないお二人が、それぞれ、平和ガイドとして沖縄戦を語り、水俣フォーラムの一員として水俣病を語る。それがとても困難であり、しかし部分的にはそれが可能であることを、北上田さんと実川さんの語りから感じ取ることができる。人は誰しもいつかは死に至る。その当たり前のことを考えると、重大な出来事の記憶を風化させないためには、非体験者がいかに語り継いでいくかが重要なこととして浮上してくる。

それにしても、北上田さんも実川さんも、どうしてこのような大変なお仕事を、自ら引き受けておられるのだろう。そこに関わらない生き方も選択しえたに違いない。にもかかわらず、あえて自らの身をそこに投じていくのは、それぞれのライフ（人生・命・生活…）に関わる大事な何かに触れる部分があるからだろうと想像した。

京都出身の北上田さんは、ひめゆり学徒隊を引率した教師のなかに、自分と同年の人を見いだして、その人のことを調べたのだという。そしてその先生が「生徒と一緒に泣いたり笑ったりしてくれるとてもいい先生」でありながら、「非常に立派な軍国教師」でもあったことを発見してしまう。そして「再び戦争が

あったときに私は果たして学校現場のなかで、NOと
言うことができるだろうか」と苦悩するのである。

一方、「社会問題に関心のあった高校生」であった
実川さんは、水俣病の患者たちが東京で座り込みの活
動を始めたときに、「何かお手伝いすることができ
ないかと思って通い始めた」のだという。そして、
「患者の方々が信頼してくれるのは水俣フォーラムと
か、水俣・東京展実行委員会という団体や肩書きでは
なくて、『あなたと私』という『サシ』の関係、『お前
と俺』の関係である」ということに気づくに至る。そ
の「あなた」「お前」にあたるのが、他の誰でもない
自分自身なのだということを悟るに至ったのであろう。

北上田さんや実川さんの実践には、その熱意や労力
の度合いという点でとても及ばないのだが、私自身も
ベトナムをフィールドに、かのベトナム戦争の渦中に
いたベトナム人たちがどう経験したのかという視点か
ら——アメリカ側からの見方、ないしはハリウッド映
画に描かれたベトナム戦争の視点からではなく——、
人々の体験を汲み取ろうと多少は努力をしてきた。そ
のようにしてきたことについて、私にも思い当たる節
がある。1992年に初めてベトナムに行ったとき、1968
年に発生したソンミ虐殺事件⁷⁾の現場の村へも行き、
小さな記念館で504人の犠牲者の名前を眺め、当時4歳
だった人が含まれていたことを見いだした。1964年生
まれの私は、1968年の時点で4歳。つまり同い年の人
が、ここでアメリカ兵によって殺された事実を知った
のだった。4歳の私は外で遊ぶのが大好きな日焼けし
た幼稚園児だった。その人もきっと私と同じく遊び盛
りの子どもだっただろう。その人は殺され、私はどう
いうわけか今も生きている。頭を何かで打たれたよう
な衝撃が走った。

そのようなライフに関わる経験を通して、人は何か
に突き動かされ、打算を越えた行動をとっていくこと
ができるものなのかもしれない。実川さんは、「今の
若い人は自分に対する関心から入って行って、その過
程で社会的な関心に結びつく」という「逆の入り方
をしている」と指摘する。1975年の戦争終結から30年
以上が経過した現在のベトナムでは、毎年4月30日のサ
イゴン解放記念日や9月2日の独立記念日に「輝かしい
戦勝の歴史」がテレビや新聞等を通じて喧伝される。
しかし、あまり人々に見向きされないように見えるの

は、それが繰り返されすぎた陳腐な「国家の物語」と
化してしまっているからだろう。当時のベトナム人の
一人ひとりがどのように生きどのように死んでいった
のかというリアリティが失われた物語は、非体験者で
ある戦後世代の人々の心にはなかなか響かない。

北上田さんは、「(非体験者の) 僕たちが沖縄戦と新
しく出会っていく」ことの重要性を指摘し、「体験の
創出にもっと重点が置かれるべきではないか」と主張
している。その点に私は全面的に賛同する⁸⁾。その上
で、そこで再生される語りが誰のものになっていくの
かという点がきわめて重要なのだと思う。沖縄戦
についての語りは、文部科学省の教科書検定という形
の国家権力で抹殺されんとした。水俣病は、公害と認
定されるまでに12年、国家の加害が認定されるまで半
世紀近くの時間がかかっており、その語りはやはり国
家権力によって抑圧され続けてきた。その一方でベト
ナムでは、国家によって逆に語りが再生産され、それ
を国民に押し広められるという構図が見られる。語り
は、社会的・政治的な力学関係のなかで、抑圧され抹
殺され、一方で再生産され成長していくものである。

草の根で生きた一人ひとりの体験者たちの語りに常
に立ち返り「私たちの語り」にしていく努力が必要
なのだろう。しかし私は、2004年末のスマトラ沖大地震
による津波被害が甚大だったタイ・プーケットで、む
しろ被災の記憶を語らず、上手く忘却していくことが
人々にとって重要であるらしいことを見いだしてしま
った。被災してから約2ヶ月後に当地に行ったときには、
そのときの出来事をときにユーモアさえ交えながら
語る“明るい”人たちに会った(伊藤, 2005)。そ
してその後、4回にわたって当地に足を運んだのだ
が、約2年半後には、「なぜ今さら津波の話をするの
か」と言われそうな雰囲気であることを感じた。津波
災害はすでに“過去”のこととして、むしろ風化させ
ることを促進しているようにすら見えた。そこで私は
自問せざるを得なくなる。はたして過去の悲惨な出来
事は常に語り継がなければならないのか、むしろ語
らないことが人々のこれからの生きる力に繋がること
もありうるのかもしれないのではないか、と。

そこから先の答えは、私にはまだわからない。しか
し、北上田さんや実川さんの非体験者としての語り継
ぎが否定されるものでないことは確かだ。お二人のロ

一カルな実践を結びつけたインターローカルな視点から、人々のライフに触れんとする質的研究者の在り方が、鋭く問われてくる。語りを扱った質的研究が力を持つかどうかは、単に方法論をきちんと押さえて研究としての手続きを踏んでいるかどうかという点だけによるのではなく、私たち自身が非体験者として語り継ぐという役割を身をもって引き受けられる覚悟ができるかどうかにかかっている。

2 語りをむすぶメディアエーター（媒介者）——協働生成の現場づくり やまだようこ（京都大学大学院教育学研究科）

2人の話題提供者の語りは、聞くものの胸に深くひびき、経験に裏打ちされた確かなことばがもつ生成力を実感させてくれた。しかも、それは実践報告という域を超えて、ナラティブの根本問題に迫る大変興味深いものであった。私は、2人の話を学問のことばで、どう語り直せるかを考えながら聞いた。

（1）語り継ぐとは何か——「過去の記憶の保存や伝達」から、未来を生み出す「むすび」による生成的継承へ

北上田さんは「語り継ぐだけではダメだろう」と語り、実川さんは「他者の経験したことを自分のこととして受け止めることができるのか」と問われた。過去の記憶を保存して伝達し「世代継承」という考え自体に大きな限界があるということだろう。未来を生きる世代が自分の経験として、新たに他者の語りと切り「むすび（結び・産び）」、その語りに新しいいのちがふきこまれて「生成継承」されねばならない。別々の歴史・文化・状況的文脈に離れていたものが、あるとき出会って結ばれると、新しい「いのち」が生まれる。「むすび」とは、「むす（産む・生まれる）ひ（力）」のことである。体験が異なるだけではなく、世代が異なり、時代が異なり、生活が異なり、その体験を支えていた文脈が既にある。追体験が難しい継承には、なおさら新たに未来を生み出す力、「生成」という働きが不可欠だろう。

（2）語りの協働生成の場づくり——一方向的通信伝達モデルを超えて

語り継ぎは、誰かが誰かに向かって何かを伝達する「一方向的通信モデル」ではうまくいかない。昔の記憶や体験をそのまま缶詰のように貯蔵して聞き手に受け渡すことは不可能だし、たとえ渡したとしても聞き手がその缶詰を美味しく食べて栄養にできるとは限らない。

2人の話のように、話し手と聞き手は時代文脈を異にする立ち位置にいる。共同井戸など若い人は使ったことがなく、想像さえできない。また、かつては社会運動の文脈で語られた出来事が、人と人という向き合い方のほうが若者に受け入れられやすいというように、物語の位置する時代文脈も変わっている。語り手の側には、聞き手が自分の物語を勝手に聞き手の文脈で解釈することを許容する「想像力（イマジネーション）」がいる。聞き手の側にも「想像力」によって、今ここに見えないものを生成する力が必要になる。同じモノを伝えようとするのではなく、聞き手が自分の問題として考えたり想像したりできる場、そこで話し手と聞き手が出会って協働（collaborate）して新しいものを生み出していける語りの場所をつくることになる。実川さんが言われるように「あなたと私」というサシの生身の関係をつくること、聞く側に聞く力を育てること、それが語り継ぐ活動に本質的な意味をもつのである。

（3）「現場」と「実物」で語ること

北上田さんは「現場」で語る、「実物」で語ることの重要性を語られた。実川さんは「実名」にこだわった遺影を展示していると語られた。昔の畑が今はあとかたもないなど現場は変化するが、同じ場所に自分も身を置くと、身をもってわかることがある。

現場には、写真やテレビ実況とは異なる「現場の力」「土地の力」がある。伊藤さんと私は一緒にニューヨークのグラウンド・ゼロで事件後にフィールドワークをしたことがある（伊藤、2004）。多くの追悼品はテレビで見たが、それらが、どのような場所にあるか、行って初めてわかったことがあった。それらは「生者が死者を追悼する個人的な記憶の品」であると共に「アメリカという国への愛」を語るマスター・

ナラティブの意味を帯びていた。さらに、それらの追悼品は、無言で現地の「キリスト教会」を守るように囲っており、三重の意味をもつことに気づいた（やまだ、2004）。

ランズマン（Lanzmann, 1985）がつくった「ショーアー」、ユダヤ人の絶滅収容所の映画では、過去の資料や記録映像ではなく、生き残った人に現場に直接足を運んでもらい、その場所で生身の人が、今ここで生成した生の語りが使われた。過去の事実を「伝える」情報よりも、現在の地点で「語る」生きたナラティブに人の気持が共振するのである。

しかし、「現場」にいと、かえって見えないものもある。例えばマラソンを沿道で応援すると、一瞬目の前を過ぎていく選手の生身のスピードや汗や風は味わえるが、マラソンという出来事全体はテレビの実況中継のほうがよくわかる。しかもリアル・タイムで見るその映像も「出来事そのまま」ではなく、多くのカメラで撮った映像を選択し編集（ナラティブ化）されて流されているから、よくわかるのである。実川さんが言われるように、「現場」「実物」「実名」「当事者」「患者」でなければ語れないものもあれば、そうでなくてもいいものがある。また、逆に渦中にいた当事者では、かえって語れない、わからないものもあるだろう。

（４）いい加減に足を運べる「場」——展覧会という自由な参与のかたち

実川さんが語られた展覧会という形式は興味深い。講演や映画は時間を拘束され、制作者のストーリーに従うので影響力も大きい。しかし、参加者が見たいところだけつまみぐいしてもいい、いい加減に足を運びやすい場をつくることも大事だろう。それによって参加者が主体的に関われる、むすびの「余白」「のりしろ」ができる。

どの語り方法によっても、体験を全部完全に100%伝えることは不可能である。何が大事だろうか。ほんの1%でもいい、あるいはたった1つのことばでもいいから、参加者の琴線にピッと響いて、聞き手が生きている人生の文脈に生成的に「むすび」つけられる方が大事だろう。1つのことばしか伝わらなくても、それを腑に落ちるまで考えつづけられる人を育てたい。

自由度の高い場が、おもしろくない「むすび」生成の場になるかもしれない。

（５）メディエーター（媒介者）の役割——協働の学びのトライアングルモデル

戦争体験のない北上田さんは、爆弾の破片を手に、それがどのくらいの殺傷力をもつのかを想像しながら「私の体験」を語ると言われた。実川さんは、高齢化や心身の負担を考えると、「語るのは当事者でなければいけないか」という問いを投げかけられた。

2人が現場で実践しながら考えてきた経験と、私たちがナラティブ研究で考えてきた経験は、非常に大きく重なるが、それはナラティブ方法論の未来展望につながるだろう。

語り部活動には、語り手と聞き手の対話の関係性を考え、語り手側の条件や語り方の技術だけではなく、聞き手側の条件、聴衆（オーディエンス）の主体的関与をどのように準備するかが重要になる（矢守・松木、2008）。

さらに、語り手と聞き手の二者対話モデルを超えるモデルも必要になるだろう。その一つとして、語り手と聞き手のあいだを媒介し、その関係を生成的にむすぶメディエーター（媒介者）の役割を重視する「協働の学びのトライアングルモデル」（やまだ、2007b）が利用できる。それは、語り手が聞き手に伝達し指導する一方向的モデルでもなく、語り手と聞き手の二者対話モデルでもなく、三者の関係を含む三者対話モデルであり、そして語り手や聞き手「個人」よりも、語りが生起する場所（トポス）を基底とするモデルである（やまだ、2009）。

メディアには、「媒介」「媒体」「中継」という意味のほかに、「巫女」や「培養基」という意味もある。メディエーターは、語り手と聞き手を現場で縁むすびする「仲人」や、壊れやすい新しいのちの出産をケアしながら介添えする「産婆」の役割をもつ。メディエーターは、異なる文脈の出来事を、今ここにある生身の自分の身に「うつし」てむすびをつくる巫女でもある。メディエーターは、異文化をむすぶ「翻訳者」でもある。翻訳者とは、単に一对一の言葉の置き換えをする人のことではない。元の文化的文脈に埋め込まれていた意味を「はなし」、別の文化的文脈に「うつ

し」(transfer, translate)で「むすび」、新しい意味を新たな文脈で再生成する人のことである。

戦争体験のない北上田さんが、「私の体験」を語る方法はメディエーターとして位置づけられる。メディエーターは、出来事を我が身で語り直す「語り部」であり、聞き手に自分のやり方を教えて手ほどきする「教師」としての役も担っている。直接の当事者には、その当事者でないといけない話をしてもらい、「説明者」が補助するという実川さんの方法も、メディエーターと位置づけられる。

実は、ことばで伝えられることには、もともと大きな限界がある。沖縄や水俣のような重い体験に限らず、昨日起こった出来事を今日伝えることも難しい。それでも人と人をどのようにむすぶかを考えるならば、ことばや物語や映像などの「媒体」を使い、仲介者や解説者や翻訳者などの「メディエーター」を介さなければ、語るという行為は成り立たない。過去の出来事を語り継ぐという問題は、沖縄や水俣の問題を超えて、ナラティブとは何かを考え、私たちのコミュニケーションのあり方を考える、根底的な問いにつながっていくだろう。

5 コメントをうけて

1 「メディエーター」と「ライフに関わる経験」について現場で考えたこと

北上田源

シンポジウム後、私の頭の片隅にあり続けるのは、「メディエーター(媒介者)」という役割と、「ライフに関わる経験」という言葉についての数々の問いである。「メディエーターとはどんな存在か?」あるいは「私(私たち)がメディエーターになり得ているのか?」、そして「私は誰かにとっての『ライフに関わる経験』を創出できているのだろうか?」そうした問いの数々を抱えながら、日々の実践を続けている。

報告の中でも少し触れた「虹の会」というグループの主催で、沖縄県内の中高生を対象としたフィールドワークを昨年末開催した。現場でガイド役を務めたの

は、私も含めた虹の会のメンバーであり、フィールドワークの行程の中には、参加者の中高生と虹の会のメンバー(大学生)と戦争体験者(元ひめゆり学徒)の交流会も設けた。虹の会のメンバーは限られた時間の中で、それぞれ個別の沖縄戦との出会い方・向き合い方を中高生に語り、交流会では中高生と一緒に戦争体験者に疑問を投げかける時間を持った。

中高生の残してくれた感想からは、非戦争体験者が戦争に向き合っていく際の一つの「モデル」として、虹の会(あるいはメンバー個人)の存在が受け止められていたことがわかった。通常の平和学習であれば、戦争体験者と非体験者(中高生)という組み合わせが多いが、このフィールドワークではその二者に加えて、虹の会(大学生)が重要な位置を占めていたと考えられる。そこに、やまだ氏の言う「メディエーター」としての私たち(虹の会)の存在の意義を見出すことはできないだろうか。

しかしながらこのフィールドワークが、参加者にとって「ライフに関わる経験」(伊藤氏)になったかと自問してみると、その可能性は極めて低いと言わざるを得ない。私が「メディエーター」として、私の「ライフに関わる経験」の話をしたとしても、それは私自身の個別の経験であり、一般化できるものではない。当事者の個別な語りを引き受けながら、それをどのように「私たちの語り」にしていくのか、それは過去の出来事を私たちの「ライフ」に関わる問題として受け止めていくということなのだろうか。

そんな疑問を抱いていた時に、昨年の県民大会に参加したある知人の話を聞いた。シンポジウムの当日に沖縄で開催されていた教科書検定問題に関する県民大会には、これまで沖縄戦に興味を持たなかったであろう人の姿も多く見られたようだ。この県民大会に参加したという私の知人は、これまで戦争の話などしなかった祖母が、初めて自分(私の知人)に戦争の話をしたのをきっかけに、県民大会に行こうと思ったという。知人にとっては、これまで無関係であった「沖縄戦」という過去の出来事が、「自分の祖母の体験」、さらに言えば「祖母が戦場から生還して今自分がいる」という自己の存在に関わるものとして意味を持ちはじめたのである。

沖縄戦の記憶が、「国家権力により抹殺されんとし

た」(伊藤氏)からこそ、当事者が口を開き語り始める。そして、公の場ではない家庭の中で交わされたその言葉が孫の世代にとっての「ライフに関わる経験」になっていく。こうした個別の小さなやりとりが響きあい、積み重なることで当事者の個別の「語り」が、世代を超えて「私たちの語り」になっていくのではないだろうか。体験者が少なくなっているからこそ、平和学習にありがちな「公的な語り」ではない、「小さな語り」が生み出される場面を大切にしていきたい。

2 杉本肇さんのこと——聴き手によって生まれた語り、語りによって生まれた新たな体験

実川悠太

「非体験者が沖縄戦(＝水俣病事件)と出会ってどうつながっていきけるかという、体験の創出にもっと重点がおかれるべきではないか」という北上田さんの指摘と、「体験を100%伝えることは不可能である。ほんの1%あるいはたった1つの言葉でいいから、参加者の琴線にピッと響いて、人生の文脈に生成的に「むすび」つけられる方が大事だろう。」というやまだ先生の言葉に深く共感しつつ、「はたして過去の悲惨な出来事は常に語り継がなければならないのか」という伊藤先生の問いの重さに想いをめぐらすうち、今や私の大切な友人となった杉本肇さんについて、ぜひ、ここに記しておきたいと思うようになった。

肇さんは水俣病が多発していた熊本県水俣市の漁村に1961年に生まれた。5人兄弟の長男で、もの心ついたころすでに父、母、祖父、祖母が発病していた患者家族である。一家は69年提訴の水俣病裁判の原告団に加わり、「チッソの城下町」といわれていたこの街で、水俣病について口を閉ざさない、数少ない網元の一つであったし、90年代の初めから母の栄子さんは自他ともに認める「水俣病の語り部」の第一人者というべき人であった。しかし、肇さんははじめ兄弟が自身の水俣病体験について語ることはなかったし、「あのころのことは思い出したくもない」と言っていたという。その肇さんが母栄子さんの付き添いとして大阪の「水俣展」会場に現れたのは1999年秋である。そこで彼は、「目をそむけながら」も、水俣病事件の客観的な事実初めて触れることとなる。そして2001

年春には「水俣展」を見るためにわざわざ1人で埼玉県川口市の会場を訪れ、帰り際「何よりも見学者の熱心さに心打たれた」と語っている。そして、この年の秋、私たちが水俣病の地元水俣で開催した「水俣展」においては地元主催者の一人として、まだテーブルの空気の残るこの街で「水俣病」の文字が大きく書かれたチラシを知人たちに手渡して歩く。その翌年、肇さんは私たちが主催した講演会で自らの水俣病体験を1時間半にわたって初めて語るののである。

一家の大人たちが次々にたおれていく恐怖、第4人の面倒を見なければならぬ重い責任感、最愛の祖父の死、暗い室内で狂ったように読経に明けくれる祖母。「徐々に退院してきた母にだきしめてもらいたいのに母を気づかってじっとガマンして見つめていた、あの小さかった弟たち…」と言ったところで、もう聞きとれる言葉ではなかったが、その会場にいた者で落涙をこらえられた者はいなかったのではないか。

講演会の後、肇さんは「少し軽くなりました。」と言って、私たちの身に余る謝辞を口にした。その後、肇さんは機会あるごとに自分の体験を語り聞かせている。そして、その時の会場で肇さんの初めての講演を聞いた者は各々が、友人に、生徒に、知人に、家族に、その場に居あわせた自らの体験を語っている。

聴き手への信頼が40数年に及ぶ沈黙をやぶらせ、新たな物語が生まれる。物語りはけっして物質のようにそのまま受け渡されるのではなく、渡された者の感動が新たな物語を生み出して、その根源にあるメッセージが伝えられていく。やはり“人”こそ希望だ、経験こそ財産だ、共感こそ可能性だ、と思えるのである。

6 おわりに

菅野幸恵

最後に、4氏のことばを“つなぎ”ながら、インターローカルな視点で“語り継ぐ”ということについて考えてみたい。

1 一方向的なものではない

まず、はじめに言えるのは、過去の出来事を“語り継ぐ”とは、体験者が語り、継ぐ者が聞くという一方向的なものではないということである。前述した青山学院高等部入試問題の事件は聞き手と語り手の関係を二分化し固定化してしまったところにひとつの問題があった(岡本, 2006)。“語り継ぐ”ことは、「話を聞く人が主体的に関わり(北上田氏)」、「話し手と聞き手が出会って協働(collaborate)して新しいものを生み出していく(やまだ氏)」プロセスなのである。

沖縄のひめゆり平和祈念資料館で、非体験者の説明員⁹⁾として採用された仲田晃子氏は、体験者の話を聞く際の姿勢について、「一方的に自分が聞く形ではうまくいかず、自分自身が語ることによって初めて聞くことになる。体験者に対してさまざまな質問を投げかけると、予想外の答えが返ってくることもあり、体験者と自分との間にある齟齬をきちんと感じて、なぜ齟齬が起きているのか、体験者には何が見えていて、自分には何が見えていないのかを考えることによって聞くという作業が成り立つのではないかと述べている(仲田, 2006)。“語り継ぐ”という営みは、語る側が能動、継ぐ側が受動という固定的な関係ではなく、能動と受動の境がわからなくなるような関係の中で、語る者と継ぐ者の共働によって成り立つのである。そのことを仲田氏のことは示している。

阪神・淡路大震災の語り部グループが直面した課題を取り上げた矢守・船木(2008)の研究においても、語り手と聞き手の応答的な関係の創出が重視されている。1人の語り手と多くの聞き手という対話的な交渉が成立しにくい構図に陥りがちだったところから生じた語り部グループの課題が、双方向で継続的なやりとりが成立することによって、解消への糸口を見つけていくプロセスは、双方向的なやりとりを可能にする、語る者と継ぐ者が互いに水平にことばを交わし表現しあう「場」(下嶋, 2004)の重要性を示唆する。

2 私の物語として語る／私の物語とむすぶ

体験の継承というとき、そこにはあたかも一塊の

「体験」なるものがあるように聞こえる。沖縄戦にしても、水俣病事件にしても、当事者から語られる体験は個人的なものである。沖縄戦の体験とか水俣病の体験というものはなく、〇〇さんの体験が語られ、聞き手は匿名ではない固有名詞のある物語に出会う。水俣フォーラムにおける実名へのこだわりはまさにそのような出会いを作るためのものであろう。そのような出会いは自分の立っているところが揺らぐ可能性も秘めている。それが伊藤氏のいう「ライブに関わる経験」だからだろう。北上田氏の「同じ年の引率教員との出会い」や伊藤氏の「同じ年の犠牲者との出会い」は、彼らの足元を揺るがした。その揺らぎは、新しい私の物語が産出されるための胎動のようなものなのかもしれない。

しかし、ある人の体験に出会っても、それが今の自分の生活とかけ離れていなければいほど、あるいは実川氏のいう「聞く側の準備」が足りないと、他人事のように受け止めてしまう可能性もある。「語り手と聞き手の間に摩擦や葛藤が生じないようにしてしまう」(矢守・船木, 2008)聞き手側の問題によって聞き手と語り手の関係が固定化されてしまったら、そこからなにかが生成されることは難しい。その点で「サポーター(北上田氏)」「コーディネーター(実川氏)」といったメディエーターは大きな役割を果たす。矢守・船木(2008)同様震災の語り部活動を取り上げている高野・渥美(2007)は聞き手と語り手の間に生じる対話の綻びが、聞き手に「私にも起こりうること」を想起させ、震災の伝承を連鎖させていく契機となることを指摘し、それを促進する役割を担う媒介者(mediator)の導入を提案している。メディエーターが「翻訳者」(やまだ氏)となり体験者と非体験者の物語を“むすぶ”ことは、語り継ぐことの困難さを乗り越えるためのひとつの有用な方法であるだろう。

3 語らない・語れないこと

自分にとって大切な経験は、それが切実な経験であればあるほどすぐに他者には語れない(やまだ, 2007a)。水俣でも沖縄でも今なお口を閉ざしている人がいる。語らない・語れないことは何を投げかけるのだろう。

高橋（1995）は映画「ショアー」で扱われている「証言の不可能性」に関して「〈語りえぬもの〉を物語・叙述の仕方では語ることは不可能であるが、逆説的にその不可能性が〈語りえぬもの〉を示唆する」と述べる。映画に登場する〈証人〉たちの断片的な言葉によって、〈語りえぬもの〉は〈語りえぬもの〉としてあらわれるのである。また、語らない・語れないことは、その背景に体験者が口を閉ざさざるを得ない社会の状況、周囲の目があること（Yoneyama, 2005/1999）を示唆する。

語らない・語れないことに目を向けることは、私たちが今依って立つところの自明性を疑問に付すことにつながり、マスター・ナラティブに風穴をあける可能性をもっているのではないだろうか。荘島（2006）は従来の自己物語論では見過ごされがちだった〈語り得ないもの〉に着目し、「〈語り得ないもの〉は既存の物語に裂け目を生み出し、物語の内部からその筋書きを打ち崩し、物語の輪郭を揺さぶり続ける」と指摘している。「語らない・語れない」ことを含んだ形で過去の出来事をとらえる必要があり、そうでなければ伊藤氏の指摘する「語らないことが人々のこれからの生きる力に繋がることもありうる」ということは理解できないだろう。

注

- 1) 事件の反響は大きく、ひめゆり平和祈念資料館では、資料館に寄せられた反響や新聞記事、資料館職員・外部識者によるコメントをまとめた「青山学院高等部入試問題に関する特集」を2006年3月に刊行した。一方、青山学院に対する社会的な糾弾は厳しく、同学院では事件を受け「私たちは戦争体験をどのように受け止め、引き継げばよいのか」という学内フォーラムを行った。
- 2) 1945年3月末米軍が沖縄県慶良間諸島に上陸したことにはじまる地上戦。アジア太平洋戦争で最大規模といわれる3ヶ月に及ぶ戦闘は「鉄の暴風」と呼ばれ、沖縄の風景を一変させた。軍人よりも一般住民の戦死者が多いことがその特徴であり、10数万人の住民（当時の県民の4人に1人にあたる）が命を失った。
- 3) 水俣病は工場などから排出されたメチル水銀化合物が魚などに蓄積し、その魚を食べることで起こる中毒性の神経系の病気である。1956年に熊本県水俣湾

周辺でその発生が確認され、1968年にチッソ株式会社による公害であると認められた。発生から公害の認定までに10年以上を費やした背景には政治・社会・文化などさまざまな問題が絡まっており、そのことは石牟礼（2004）や原田（1972）などの著作によって世に明らかとなっている。

- 4) 琉球大学学生平和ガイドの会。1997年にスタートした共通教育科目「基地と戦跡」の受講生有志が集まって学習会・フィールドワークを積み重ねて年間数回の平和ガイド活動をしている。これまでに50校程度の修学旅行に関わる。
- 5) 沖縄県内の高校生・大学生が集まって作られた集まり。2004年から1年間かけて体験者数名と定期的（月1回）に集まり、若い人の疑問を中心にして対話を深めた。
- 6) 例えば、石牟礼（1969）、土本（1971）、原田（1972）など。
- 7) 1998年3月16日、南ベトナム・クアンガイ省のソシミ村で、無抵抗の村民504人がアメリカ軍のウィリアム・カリー中尉が率いる部隊によって虐殺された事件。アメリカのジャーナリストによって暴かれたこの事件は、ベトナム反戦運動の中でシンボリックに取り上げられた。
- 8) もちろん「体験の創出」という社会構成主義的な言い方には、極端には「いかなる体験でも創出されるのか」という指摘を受ける危うさも孕んでいる。歴史修正論争にも関わるこの点については、また項をあらためて論じることにはしたい。
- 9) ひめゆり平和祈念資料館は、学徒隊として戦場に動員されたひとりひとりの体験した戦争の恐ろしさを語り継ぎ、平和であることの大切さを伝える場として設立され、体験者自らが証言員として館内に立つことが特徴のひとつである。資料館では体験者がいなくなったあと、沖縄戦やひめゆり部隊の体験をどのように語り継ぐのかということについてさまざまな取り組みがなされ、その試みのひとつとして、元学徒隊の方々の語りを受け継ぐ立場として実体験のない説明員が採用されている。

引用文献

- 原田正純. (1972). 水俣病. 東京：岩波書店（岩波新書）.
石牟礼道子. (1969, 新装版 2004). 苦海浄土——わが水俣病. 東京：講談社.
伊藤哲司. (2004). 「グラウンド・ゼロ」での犠牲者追悼のかたちと9.11「同時多発テロ」の位置づけ——テロ事件11ヶ月後のニューヨークを歩いて. やまだよ

- うこ (研究代表者), 科学研究費報告書「人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築」, 205-217.
- 伊藤哲司. (2005). タイ・プーケット周辺の津波被害が共同体および住民の心身に与えた影響について. タイ西海岸津波被害調査報告 (pp.41-54). 茨城: 茨城大学調査団.
- 実川悠太. (2002). 水俣病問題——事件史認識と現在. 高橋哲哉 (編). 〈歴史認識〉論争. 東京: 作品社.
- 実川悠太. (2003). 運動体としての「水俣展」. 西谷大・寺田匡宏編. 歴史・災害・人間 (下) —— 〈展示の文法〉. 財団法人歴史民俗博物館振興会.
- 栗原彬 (編). (2000). 証言水俣病. 東京: 岩波書店 (岩波新書).
- Lanzmann, C. (監督). (1985). SHOAH. (ランズマン, C. (1995). SHOAH (ショアー) (高橋武智, 訳). 東京: 作品社.)
- 仲田晃子. (2006). 『聞く／語る』存在としての聞き手. 青山学院大学・青山学院高等部主催フォーラム「私たちは戦争体験をどのように受けとめ, 引き継げばよいのか」記録報告書 (pp.33-40). 東京: 青山学院大学・青山学院女子短期大学・青山学院高等部.
- 岡本恵徳. (2006). 自己批判の眼を. 青山学院高等部入試問題に関する特集. ひめゆり平和祈念資料館.
- 下嶋哲郎. (2004). 戦争を語り継ぐ形——未来=希望へ向かう若者たち. 世界, 6, 225-235.
- 荘島 (湧井) 幸子. (2006). 自己物語論への《語り得ないもの》という視点導入の試み. 心理学評論, 49 (4), 655-667.
- 高橋哲哉. (1995). 記憶されえぬもの・語りえぬもの. 高橋哲哉・鶴飼哲 (編)「ショアー」の衝撃 (pp.150-160). 東京: 未来社.
- 高野尚子・渥美公秀 (2007) 阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考察——対話の綻びをめぐって. 実験社会心理学研究, 46, 185-197.
- 土本典昭 (監督). (1971). 映画「水俣——患者さんとその世界」. 青林舎.
- やまだようこ. (2004). 事故死の「現場」における生者と死者のコミュニケーション——ニューヨーク, グラウンド・ゼロにおける追悼の語り. やまだようこ (研究代表者). 科学研究費報告書「人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築」. 218-229.
- やまだようこ. (2007a). 喪失の語り——生成のライフストーリー. 東京: 新曜社.
- やまだようこ (編). (2007b). 質的心理学の方法——語りをきく. 東京: 新曜社.
- やまだようこ (2009) 対話的場所モデル——多様な場所と時間をむすぶクロノトポス・モデル. 質的心理学研究, 8, 25-42.
- 矢守克也・船木伸江. (2008). 語り部活動における語り手と聞き手との対話的關係——震災語り部グループにおけるアクションリサーチ. 質的心理学研究, 7, 60-77.
- 米山リサ. (2005). 広島——記憶のポリティクス (小沢弘明・小澤祥子・小田島勝浩, 訳). 東京: 岩波書店.
- (Yoneyama, L. (1999). *Hiroshima Traces: Time, space, and the dialectics of memory*. Los Angeles: University of California Press.)

付 記

本文中, 実川氏の報告に登場する, 杉本栄子さん, 土本典昭さんは, シンポジウムが行われた翌年の2008年に永眠された。ここにご冥福をお祈りする。

(2008.1.8 受稿, 2008.5.27 受理)